

カント「純粹理性批判」における人間の基本構造 II

上田, 富美子

<https://doi.org/10.15017/213>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 18, pp.47-55, 1991-03. Kyushu University School of Health Sciences Fukuoka, Japan

バージョン :

権利関係 :

カント「純粋理性批判」における人間の基本構造 II

上 田 富美子

Die fundamentale Struktur des Menschen in Kants Kritik der reinen Vernunft II

Fumiko Ueda

Die ersten Sätze der transzendentalen Elementarlehre der Kritik der reinen Vernunft führen uns letztlich zu einer Beziehung zwischen der Erkenntnis und dem Willen. Die Erkenntnis selbst ist nichts anderes als eine Haltungsentscheidung des Menschen. So können wir auch einen Weg zur Kritik der praktischen Vernunft finden.

何ごとによらず、一つの著作の冒頭部は極めて重要な意味をになっているように見える。なぜならそこからすべての論述は展開され、帰結へとつながって行くからである。いわば起点こそが全篇を貫く導きの糸となり、その推進力ともなって、著作の誕生を促し、もたらずに至ると考えられる。換言すれば、そこにはすでに全著作のエッセンスがこめられているとすることができるのであり、したがってその説明は、全体把握の重要な鍵を前以て手渡されることにならなければならないであろうか。

そこで以下この視点に立ち、カント「純粋理性批判」(Kritik der reinen Vernunft)の掘って立つ冒頭部について考察を図ることで、カント哲学の本質へと接近し、併せそこに映しだされる「人間」の根本問題への論究を試みたい。

1

カント「純粋理性批判」の本文は以下の論述を以て始まる。

「認識 (Erkenntnis) がどんな仕方 (Art) で、またどんな手段 (Mittel) によって対象 (Gegenstand) に関係する (sich beziehen) にもせよ、認識が直接に (unmittelbar) 対象と関係するための方法 (Art)、また一切の思惟 (Denken) が手段として求める (abzwecken) ところの方法は直観 (Anschauung) である。し

かし直観は、対象が我々に与えられる (gegeben) 限りにおいてのみ生じる (stattfinden) ものである。ところで対象が我々に与えられるということは、少なくとも我々人間にとっては (uns Menschen wenigstens)、対象が或る仕方で (auf gewisse Weise) 心意識 (Gemüt) を触発する (affizieren) ことによつてのみ可能 (möglich) である。我々が対象から触発される (affiziert) 仕方によつて表象 (Vorstellung) を受け取る (bekommen) 能力 (Fähigkeit) (受容性 Receptivität) を感性 (Sinnlichkeit) と言う。それだから対象は、感性を介して (vermittelst) 我々に与えられる、また感性のみが我々に直観を給する (liefern) ののである。」(傍点原文ゲシュペルト)⁽¹⁾

ところでここには用語の特殊性と叙述の多少の複雑さは別として、至極当然のことが述べられているように見うけられるであろう。我々はさしたる抵抗もなくこの部分から他の部分へと読み継いで行けるかも知れぬ。カント自身の口調も滑らかで、そこにはいささかの滞渋や躓きも見出せそうにない。それが証拠に再度の書き改めを余儀なくされたこの著作において、この部分に関してはただ一箇所、それもほんのわずかな補足がなされているに過ぎないのである。だが果して実際、そこにはいかなる問題も存在していないのであろうか。そのためにはさらにつ

ぶさな検討が要求されることは言うまでもない。

さてここではまず「認識」(Erkenntnis)のはじめは「直観」(Anschauung)であり、それは「認識」が「対象」(Gegenstand)へ「直接的」(unmittelbar)にかかわることであり、このことが取りも直さず「対象が与えられる」(gegeben)ことを意味するとされる。ここにはまさに、私たちと「対象」との出会い、両者一体となった不即不離の関係が示唆されているように見える。ところが、後半の部分においてこの事情は一変する。「対象」とわたしたち人間との直接的接触は阻まれ、「対象」が私たちの側(ここでそれは「心意識Gemüt」⁽²⁾という特殊な用語で以て呼ばれているのであるが)を「触発する」(affizieren)⁽³⁾ことによって、「対象」それ自身でなくかわりに「表象」(Vorstellung)が与えられるとされる。そして私たちの「表象」を受け取る「能力」(Fähigkeit)は「感性」(Sinnlichkeit)と呼ばれるのであるから、「対象」は直接私たちに与えられるのではなく、「感性」を介して(vermittelst)のみ手渡されるとされる。

これは一体どうしたことであろうか。二つの相対立した見方のうち、いずれがカントの真意を代表するものなのか。ところでこの点に関しては子細な検討をまつことなく、単なる形式の上からも一応の解答を得ることができるように思える。というのはあらゆる見解において、結論部が最も重要であることは言うまでもないことであり、論者の主張の本旨はこの部分においてこそ最も鮮明に打ち出さるべきはずのものだからである。しかし結論に反する前提が置かれているということは、通常の論述にあっては考えられない。もっとも上記カント見解に対し一そうの注意を以て臨むならば、予め結論へ向けていくつかの伏線が用心深く敷かれていることに気づかざるをえないであろう。すなわちまず第一に「認識」がそこから始まる「直観」が、「対象」との「直接的」(unmittelbar)な「関係」であることが主張されながら、他方この「関係」の「直接性」に対し「どんな仕方(Art)で、ま

たどんな手段(Mittel)によって」という表現が付加されることによって、それが同時に否定されるという結果となっている。そのことは訳語によっても十分察知されうるが、原語の場合一そう明確となる。なぜなら「直観」という同一事態を表わすのに、〈Mittel〉と〈unmittelbar〉という語が同時に用いられており、これらはその語形上からしても相反する意味をもたざるをえないからである。しかしながらこれは、通常の叙述では考えられない奇妙な事柄ではあるまいか。だがこの点についてより明確を期するためには、ともかく続く論述に視点が当てられる必要がある。

さて上記部分に引き続き、全論述のちょうど中間点にも相当するところに、私たちは注目すべき二つの同一表現を見出すであろう。すなわち「対象(Gegenstand)が我々に(uns)与えられる(gegeben)こと」がそれである。これらはいずれも「認識」の端緒をなす「直観」の説明として呈示されたものであるが、同一表現ながらその意味内容を大きく異にするように見える。つまり前者では、「対象」(Gegenstand)に力点が置かれているのに対し、後者の場合、明らかにそれが「我々に」(uns)の部分に置かれていると考えられるからである。そしてそれは実際、その直後に一つの言葉が添えられていることによっていよいよ明確となる。それはこの著作の第二版において、上記カント見解中ただ一箇所付け加えられた部分であり、「ところで対象が我々に与えられるということは、少なくとも我々人間にとっでは(uns Menschen wenigstens)」(傍点筆者)の傍点部がそれに相当する。こうして前の場合は論述の前半部に添うて、「認識」における私たちと「対象」との直接的かかわりに力点が置かれ、ために両者はほぼ対等に位置づけられているのに対し、後の場合は私たち「人間」の側だけが大きく際立てられる結果となっている。すなわちこの一見さりげない挿入部はさきの予想通り、上記見解中の転換点を形成するという重い役割をになわされているのであり、その意味では付加の必然性

も納得されるであろう。

こうしてここを起点として全篇の論調は完全に変化し、「認識」における私たちと「対象」との直接的遭遇は無視され、「対象」ないし「直観」は私たちの内部にある「能力」(Fähigkeit)すなわち「感性」(Sinnlichkeit)を介して(vermittelst)与えられるという結論に至る。

ここに示されたのは一つの見事な「すり替え」の妙技であり、私たちはしばし唾然たらざるをえないが、それともさきにも少しく触れたように、結論部こそがカントの真の主張であり、ために相矛盾するように見える前半部にも然るべき手のこんだ措置が施され、論述の一貫性はそれなりに保たれ帰結へと向っていると言うべきなのであろうか。しかしながら多少の補修では追いつかないほど、そこにある亀裂は深いのではあるまいか。いやさきに〈Mittel〉と〈unmittelbar〉の同時併置の場合に指摘したように、こうした補修措置自体がすでに分裂していると言えるのではないだろうか。

2

さて上に見たように、冒頭カント見解の不整合は否めないにしても、その主要な主張が後半部にあることは誰も承認せざるをえない。しかもその部分はさきにも述べたように、「少なくとも我々人間にとっては」という第二版における補足を以て開始されているのである。これは極めて注目すべきことのように思える。というのはこの一句によって後半部が、とりわけてはかならず「人間」の問題であることが印づけられているからである。それはこの部分が人類共通の普遍的問題であることを示すとともに、他方同時にそれが「人間」固有の特殊的問題でもあることを意味するであろう。付加部における「我々人間にとっては」(uns Menschen)はその「共通性」を、「少なくとも」(wenigstens)はその「特殊性」を示唆することになるからである。

そしてこれを承けてさきに見たように「対象」は「感性」を介し「表象」(Vorstellung)とし

て、私たちに与えられるとする人間の「認識」の間接性が導出される。だがこれは果して「認識」と呼べるものなのであろうか。ここでのカントの主題が「認識」であることは言うまでもないが、こうした結論はかえってその不成立をこそ示唆することになりはしないだろうか。というのは「認識」は「対象」を知ること以外の何ものでもないに相違ないが、ここでは「対象」は一たん遮断され、むしろ遠ざけられているようにさえ見えるからである。さらに言えば、ここでそれは私たちの内部能力たる「感性」を透過し、「表象」とその名を変えて内面化され、さきにも触れたように別のものへとすり替えられているからである。

しかもこの代替物は本物と似ているのか、全く相違しているのかも不明である。両者の関係は完全に恣意的であり、それは冒頭カント見解の後半部への転換点に相当する箇所において、つぎのように言われたことと無関係ではあるまい。すなわち「ところで対象が我々に与えられるということは、少なくとも我々人間にとっては、対象が或る仕方であつて (auf gewisse Weise) 心意識 (Gemüt) を触発する (affizieren) ことによつてのみ可能である」

この部分は言うまでもなく「認識」の直接性が間接性へと切り変る最も重要な箇所であり、ここにおいてこそこの一大転換が説得力を以て提示されなければならないところである。しかしながら上記引用自体から判明なように、それは一篇の作り話を提供しえたにすぎないのではなからうか。「或る仕方であつて」という表現も曖昧なら、「心意識」、「触発」などという耳慣れない言葉も作為的な印象を与える。これでは私たちはその代替物を喜んで受け容れるどころか、そのあやふやな出自にいよいよ疑いの目差しを向けるよりほかないのではないか。いやそもそも如何に巧妙に取り繕われようと、代替物はしょせん代替物であつて本ものではありえない。私たちはここでも否応なく、1の終りに見たあの一つの亀裂を突きつけられることになるであろう。

さてここまできて、このような事態はむしろ、

つぎのように考えらるべきことを要求しているのではないかと気づかされる。つまり、ここにはもともと一つの深い亀裂があり、それを償おうとして苦心の操作と補修作業は後から行われたのではないかと。したがってそれはどこまで行っても作為的なわざとらしさを免れず、必然性に欠け、代替物としてのお囁しの提供たらざるをえなかったのではないかと。

そこで私たちは、カント見解の再度の問い直しを迫られることになる。そしてそれはまたかかる「亀裂」がどこに由来したかをたずねることでもあるに相違ない。

3

冒頭カント見解はまず「認識」(Erkenntnis)という言葉で以て開始される。そしてつぎに「対象」(Gegenstand)という言葉が置かれ、「認識」は両者の「関係」と言われるのだが、この順序自体が重大な意味を含んでいるように見える。すなわちここでは文章自身の中で「認識」は「主語」(Subjekt)の位置を占め、それに対して「対象」は「目的語」(Objekt)として「述語」の地位に置かれている。したがってカントがそれを避けようといかに努力したとしても、「対象」の二次的在り方は明らかと言わねばならない。というのは「主語」はつねに先立つものであり、「主語」なくしては何事も生じえず、他の一切はそこを起点として展開されねばならないからである。もっとも「主語」によって予め設けられた許容範囲内においてではあるにしても。

ところでこれら文章表現に見られる主述関係ないし主客関係こそ「認識」の形態そのものにほかならないのであるから、カントのこの「認識」についての見解はそれらをさらに根拠づけ、その拠って来る所以をも示すという二重の性格をもつであろう。換言すれば、主述関係、主客関係と言うも、それはその基底にある私たちの「認識」の在り方の反映にすぎないと言いうるからである。したがってカントのこの論述は、「認識」を中心とした「人間」の在り方について、何

か極めて重要なことを呈示してくれてもいるに違いない。

さてそこで、上記カント見解が先ず以て「認識」の先立から展開されていることは、「認識」における認識する側、すなわち私たち認識主体の側の優先を意味するであろう。しかもこの「優先」には理由がなく無前提的である。この点がまず押えられねばなるまい。そこからさきにも見たように、おのずと「対象」(Gegenstand)の二次的性格が導き出されてくるが、それはすでに「対象」という言葉自体が示すところでもある。なぜなら〈Gegenstand〉という原語は「向って立つこと」を意味し、先立するものが前提されているからであり、またさきに「目的語」を指すとした〈Objekt〉についてもこれは同時に「対象」という意味をもち、もともとラテン語の「向う側に投げられたもの」(objectum)に由来して、全く同様のことを表わしているからである。

ところで上に見たように「認識」における認識主体の先立優先が、おのずから「対象」の側に二次的従属的在り方を強い招来するのであれば、「認識」の成立とその成否はひとり認識主体の側にのみかけられ、そののみが負うことになるであろう。ちなみに「主体」(Subjekt)はラテン語の〈subjectum〉に由来し、接頭語〈sub〉は「こちら側」を意味するのであるから、〈Objekt〉に対し対照的な位置を占めることは言うまでもない。こうして「対象」は、「認識」の内部要素への読み変えと転換を迫られることになる。それはまた上記カントの見解の如実に示すところでもあろう。

したがって、こうした結末は叙述がまず「認識」という語を以て開始された時点から、当然予想されうることであったと言っているかもしれない。またそのように見る限り、さきに挙げた矛盾や齟齬も、この大きな脈絡の中では些少なものと映らざるをえず、一種の修辞の類いにまで転化するおそれなしとしないであろう。

ここまで来て私たちは、上記カント見解に見られる諸々の問題は、ただ一点にこそ由来する

ことを知るに至る。言うまでもなく「認識」における私たちの側、すなわち「自己」の側の無前提的先立がそれである。そこから「認識」は、カントの叙述自身が示すように、複雑怪奇な様相を呈し、果てもなく代替物を送ってはきても、ついに「真実」に達することなく、結果として「認識」の不成立をもたらすという奇妙な事態となる。

では「認識」における「自己」の側の先立優先とは、一体何なのか、しかもそれが無前提的であるということは。言うまでもなくそれは、「関係」の両項のうちから理由なく一方のみを先取するということであろう。その結果、「関係」は均衡を失い崩壊する。換言すれば「認識」はその成立の場そのものを奪われる。すなわち自己優先とは、他とのつながりを断つことと同義である。したがってさきに1、2において指摘した「亀裂」とはまさにこれに相当するであろう。それはまたすでに述べたように、上記カント見解のあらゆる部分に付きまとう一つの相貌でもあった。要するに「自己優先」と「亀裂」とは、同一事態に対する表現の相違にすぎないと言っていいであろう。

しかしながらそれでもなお、私たちが敢えて「認識」に固執しこだわるとすれば、「自己」の内部に本来の「関係」を移行して一種のシミュレーション・ゲームを行うよりほかあるまい。そこで与えられるのはしょせん「代替物」にすぎない以上、このゲームにたとえ終りはありえないとしても。

いずれにせよここに映し出されるのは、人間存在の抱える大きな「矛盾」である。そしてそれは、第二版のあの短い付加部「少なくとも我々人間にとっては」がいみじくも示しているように、私たち「人間」に共通の普遍的問題として提示されているのである。さきにもすでに触れたように、そのもつ意味は極めて重いと言わなければならぬ。

だがそれにしても、私たちは「対象」との「関係」を一たん断ちながら、他方どうして再びそれをつなごうと試みるのであろうか。たとえそ

れが代替的な「シミュレーション」であるにしても。ここにはもしかして「人間」の別の秘密が隠されているのかもしれない。

4

上に見たように上記カント見解を通じて最終的に私たちのもとに残されるのは、私たち認識する側、すなわち「自己」の側の無前提的優先ということであったが、それは果して本当に最終的、究極的なものと言いうるのであろうか。「認識」における「認識する側」の先立優先ということは、言うまでもなく「認識される側」との「関係」を下敷きにしている。その上で一方の項だけが優先的に取りあげられたのだ。したがって「認識する側」は決して「関係」から自由にはなりえない。その出自自身がそのことを要求し証明する。「関係」の一項にいかにか執着しようと、「関係」そのものを克服することは到底不可能である。というのは、一項への固執先立を支えるものもまた、「関係」自身にはかならないからである。

そしてこれこそがまた、3の末尾で提起された問いに対する答でもあろう。というのは前述のように、「関係」の一方の側への固執とその先立優先ということ自体がすでに「関係」を前提としているのであるから、そこにもたらされた均衡破綻の何らかの補償を「関係」は当然要求せざるをえないからである。こうして「関係」は消滅するのではなくただ内部へともち越され、シミュレーション化されるに至るのである。

さてこのように見てくると、カント上記見解における複雑な構成、錯綜、不整合などの原因がしだいに明確化されてきはしないであろうか。すなわちそこには、二つの相異なる形態が重層構造を形成し、お互いに被覆し合っていると見えるからである。すなわちその一つは「関係」の二項のうち、一方の側の無前提的先取優先という事態であり、もう一つはそれを支える「関係」そのものである。

ここまできて私たちは、冒頭カント見解を真に支え成立せしめたものが何であったかを改め

て知ることになる。それは一見背景に隠れ捉えがたかったが、そのこと自身何か重大なことを告げてくれているように見える。いずれにせよこれこそが目下の主題に関し、最も基底的なもの、最も根本的なものと言いうるであろう。そしてそれはカント見解がまず、「認識」における「直接性」の示唆を以て開始されたことと多分無縁ではあるまい。ところでこの点について私たちは、この著作自身の中に何か別の有力な手掛かりを求めることはできないであろうか。これがつぎの課題である。

さて上述よりおのずと推察されるように、カント「純粹理性批判」はその全篇を通じ、「対象」の内在化への苦闘の跡と見なされもしようが、それはすでに冒頭見解に示される如く、結果として成功せず、「対象」は不明の「X」として主観の枠組みの外に残されざるをえなかった。⁽⁴⁾ これは「物自体」(Ding an sich)の不明性と密接にかかわるものと言えるが、そこに生じる矛盾は、改めてカントの試みに問い直しを迫るものともなっている。

カントは冒頭見解の中で、さきに見たように内在化された「対象」を「表象」(Vorstellung)と呼び、それを新たな「対象」と読み換えることによって、そこに「認識」の出発点を置こうとしたのであるが、ここにいわゆる「表象」は他の箇所でも同時に「現象」(Erscheinung)とも呼ばれている。例えば「現象 (Erscheinung) は、表象 (Vorstellung) においてのみ実在する (existieren)」⁽⁵⁾ また「現象 (Erscheinung) が物自体 (Ding an sich) ではなくて、経験的法則 (empirisches Gesetz) に従って結合している (zusammenhängen) 単なる表象 (Vorstellung) であるとすれば、かかる現象は現象でないような根拠 (Grund) をもたねばならない」⁽⁶⁾ など。

ところでこれら二つの引用のうち、特に後者の場合、「現象」と「表象」との一致が主張されているのみならず、「現象」にかかわる他のもう一つの大きな要因が同時に提示されていることに着目される必要があるだろう。それは言うまでも

なく「物自体」(Ding an sich)である。ここではさきに提示された「物自体」とその後に関及された「現象でないような根拠 (Grund)」との関係は必ずしも明確でないものの、両者の間の何らかの緊密な相関関係は十分に推測される。それは実際以下の陳述によっても裏づけられるであろう。「我々は物自体の現われであるところの現象の形式 (Form) については多くのことをア・プリオリに言いうるが、しかしかかる現象の根底に存する (zum Grunde liegen) と思われるところの物自体については何ごとも言いえない」⁽⁷⁾ さらに「現象はそれ自体、物ではないから、現象を単なる表象として規定するためには、現象の根底に先験的对象 (transzendentaler Gegenstand) がなければならぬ」⁽⁸⁾ そしてここにいわゆる「先験的对象」は、直前の引用における同じ脈絡からそこでの「物自体」と重なり一致することは言うまでもない。

以上を通じて明らかになるのは、「現象」と「物自体」とは一对のものであり、互いに相補的で一方を欠けば他方の存立も図りがたいという点であろう。それはすでに「物自体」(Ding an sich)と、その現われ (Erscheinen) を意味する「現象」(Erscheinung) という言葉自身が示すところでもある。⁽⁹⁾

したがって、このような互いに支え合っただけのみ成立する対概念の一項だけを重視優先させ、他方を軽視放逐したところに、その体系を組み立てようとしたカントの企図にはもともと無理があったと言わなければなるまい。なぜなら「物自体」や「知られざる X」の影は絶えずその主張の裏に潜み隠れ、その試みを脅かし続けざるをえないであろうからである。どんな巧妙な手だても、そこにもともと在り、その成立を他方から支えていたものを消滅させることはできない。もしそれを敢えて行おうとすれば、自らもその存立の基盤を失い消え去るよりほかありえない。

ここに私たちは、この章の前半部で指摘した、カント冒頭見解を支える究極的なものについて有力な裏づけを得ることになる。そこにおいて

それはすでに最も基底的なもの、最も根本的なものと見なされたのであり、また「直接性」とも何らかのかかわりをもつとされたのであった。ところで「直接性」とは取りも直さず第一義的なことであり、言葉を換えれば根本的、基底的なことを指すにほかならないであろう。これらはすべて別のことではありえない。こうして私たちのもとに最終的に残されるのは、いずれかの側に偏重することのない対等な「関係」ということになる。これを下敷きにしてこそ、「認識」についての上記カント見解も初めて緒につき、成立しえたと言いうことができる。

それにしてもここに至るまでの錯綜した労多し行程は、すでにしてそのまま「人間」の本質について多くのことを物語ってくれているのではあるまいか。

5

さて以上を通じて結局私たちの手もとに残されたのは、言うまでもなく「人間」の「認識」の基底にあり、それを支え成立せしめたものであろう。それは二つの存在者がいずれかの側に片寄ることなく、対等に向き合ったかたちである。さきに「関係」自体としたものがまさにそれに相当する。それはすべてに先行し、その基盤を構成する始元的なものであった。したがってそれを他の名で呼ぶとすれば、「真理」こそ最もふさわしいと言えるに違いない。

してみるとここに映し出される「人間」の姿は、敢えて「真理」に背を向けたそれである。ところで「敢えて背く」とはこの場合言うまでもなく、対等な「関係」の両項のうちあくまで「自己」の側へと固執し、それを優先することを意味するが、そこにおいて明確となるのは「意志」の介入という事態である。「認識」は無記のスタート点であると誰しも考えがちであるが、実はそこにこそ陥穽は仕掛けられていたと言わなければならない。人間認識はすでにして意志的な選択を前提としており、その意味でそれ自体決して無垢なものではありえない。だが私たち「人間」は、そのことに容易に気づかず、いやむし

ろ気づこうとさえしない。それはすでに本稿冒頭部で指摘したように、カント自身の、そしてまた私たち自身の態度の示すところでもあった。冒頭カント見解は、ほとんど自明なこととして一応受け容れられざるをえないであろうからである。それほどまでに「人間」におけるこの根は深い。したがって、それはほとんど私たちの第二の「自然」(Natur)となり、「本性」(Natur)を形成しているとあるいは言うことができるかもしれない。しかしながらすでに「意志」の介入にかかわるものを、そう呼ぶのは決して適切なことではあるまい。それはあくまで反自然的な(unnatürlich)行為である。

このように見てくると、こうした「人間」の在り方は、そのまま多くの「神話」の主題でもあったことに気づかされる。それらは「人間」の始原を「真理」ないし「自然」からの離反に置き、それを究極には「神」への背反と規定したのであった。ここにはすでに「人間」の深奥に迫る深い洞察が隠されていると言えるであろう。

カント見解は期せずしてそこへと重なり、「認識」が「意志」と無関係ではありえないことを、またそこにおける「意志」による「選択」は、つねに「自己」の側にこそ向けてなされることを示したのであった。ところで、ここに見られる自己優先的構図に何か特定の名称を与えれば、それは「エゴイズム」と呼ばれるよりほかあるまい。人間認識は「エゴイズム」と決して無縁でありえず、「人間」のみを利するよう前以てはかられているのである。

したがって「人間」は、「認識」において相手をそのまま容認しようとせず、絶えざる自己内同化へもたらそうとするが、それは見方を変え、相手の側に身を置けば、一方的「征服」へと転化することになろう。「人間」の前ですべてはもの言わぬただの「対象」と化し、その意に委ねられる。しかしながらそれは裏を返せば、逆に「人間」は決して相手に、「対象」それ自体に届くことはありえないことをも意味し、人間認識は反面「悲願」へと転じる可能性をももっている。「倦くことなき無限への挑戦」——それは「人

間」が最も好む言葉の一つに違いない。

その意味でカントがこの著作に払った並々ならぬ労苦は、そのまま「人間」が生きることのそれへとつながりうるであろう。再度の書き替えを余儀なくされたこの労作は、試行錯誤の連続の中へと置かれざるをえない「人間」の在りようを、如実に映し出していると言うこともできる。

いずれにせよ、「純粋理性批判」本文冒頭のカント見解が集約的なかたちで提示するのは、「人間」にとっては、その第一歩たる「他者」との「関係」が最大の難題としてかけられるということであり、換言すれば、先ず「認識」こそが解きたい課題として私たちに与えられるということであろう。「他者」との「関係」をそのままつなぐことができず、それが「認識」という難問へと転化するのは、おそらく「人間」を措いてほかにあるまい。それゆえに「人間」は自らの困難な出立点を飾るに、「認識」というものものしい言葉を必要としたと言いうるのかもしれない。「認識」は「人間」にとってつねに「問題」であり、言葉を換えればそれは同時に「人間」であることのしるしでもある。「認識」はその意味で、人間存在の究極の一点を指し示し、したがってカントが「人間」についての本格的論究を「認識」を主題とするところから開始したことは、まことに至当なことであったと言わなければならないだろう。「人間」にとっては何よりもまず自分自身が課題であり、それは取りも直さず「認識」がそうであるにほかならないからである。

そしてまたこれらすべての原因は、「自己執着」ないし「自己優先」、換言すれば「エゴイズム」の構造の中にこそ求められたのであった。だとすれば「人間」における問題は、「認識」をも含めて結局「意志」の問題へと帰着せざるをえないのではないか。ここに「人間」の根底に潜み隠れる究極的なものへの一つの到達がある。

したがってカントのつぎなる課題が、この問題と正面切って取り組むことにかけてられたのは言うまでもない。それがほかならぬ「実践理性

批判」(Kritik der praktischen Vernunft)であり、私たちはここに両批判書の必然的連関を改めて知らされることになる。「人間」の歩みに添うて「純粋理性批判」は、「実践理性批判」をどうしても必要とせざるをえなかったし、またそうでなければ、真に「人間」として生きる領野は私たちに開かれえない。そこにおいてはじめて「人間」は自らの「意志」をもって我執を断ち、「真理」へと向うことを要請される。そしてそれは、以下のような端的な命令の言葉として提示されるであろう。「汝の意志 (Wille) の格律 (Maxime) が、いつでも同時に (jederzeit zugleich) 普遍的立法 (allgemeine Gesetzgebung) の原理 (Prinzip) として妥当する (gelten) ように行為せよ」⁽¹⁰⁾

ここにはまた、「人間」における「転換」(Kehre) ないし「回心」(Konversion) の必然性についての深い秘密も隠されているように見える。しかしながら、この点についての論究は目下の課題ではなく、後の機会に委ねるよりほかあるまい。

カント「純粋理性批判」冒頭見解がもたらした大きな収穫は、「人間」の「認識」がすでにして「意志」と無関係でありえないことを示唆した点であろう。カントは「認識」の基盤を掘りさげ、期せずしてその中立的装いの背後に潜む「自己」への偏執、すなわち「エゴイズム」へと逢着したのであった。そしてこれが私たち「人間」にとってともかくも中立的であり、客観的にすら思えるのは、「少なくとも我々人間にとっては」という第二版の付加部が示すように、それが「人間」共通の枠組みにかかわり、その意味で人類普遍の問題に連なるからに違いない。だが他方、この付加部には「少なくとも」という一語が同時に添えられることによって、それが真の「普遍」に与るものではなく、「人間」にのみ固有な特殊的事態であることをも示したのであった。この意味するところはいいよよ重いと言わざるをえない。それはカント以後二百年にわたる私たちの歩みが如実に証明するところ

でもあろう。「類的エゴ」の克服——それが私たちにかけられた課題であり、それがいま、「人類」の「生存」と「存続」の際で問われているのではなかろうか。いや、それはひとり「人類」の「生存」に限定される問題ではなく、私たち「人間」の「構造」自体が負う、すべてのものへの「責任」であろう。

〔註〕

(1) K. d. r. V., 33.

以下特別の表記がない場合は、B版（第二版）の頁付けによる。

(2) 一般には「心」という訳語が当てられる。

(3) 一般には「刺激する」という訳語が当てられる。

(4) Vgl. K.d.r.V., A104, A109, A250.

(5) Ibid., 534.

(6) Ibid., 565.

(7) Ibid., 66.

(8) Ibid., 566.

(9) Vgl. Erich Adickes, Kant und Ding an sich, Pan Verlag Rolf Heise, Berlin, 1924, 2.

(10) K. d. p. V., 54.

原版 (Originalausgabe) の頁付けによる。